高知学園大学・高知学園短期大学紀要　第56号（2026）：83－90

報告論文

紙素材による造形活動の幼児の表現の広がり
―造形ワークショップの実践記録を通して―

川口　奈々子[1*]

要約：本研究は，造形活動における子どもの表現とファシリテーターの関わりを記録し，子どもが自ら表現を発展させていく過程を明らかにすることを目的とする。特に，紙の素材感，道具の扱いやファシリテーターとの関わり，環境構成が子どもの表現に与える影響に着目した。令和７年に行われたワークショップに参加した５歳児２名の活動を中心に，素材操作や発言，作品の変化を記録した内容を報告する。観察の結果，子どもの素材との関わり方から展開される表現が，それを支える道具やファシリテーターの援助によって広がることが示唆された。本報告は，造形活動における子どもの創造性を理解し，今後の子ども理解や教育実践を考えるための手がかりとする。

キーワード：幼児，子ども，造形表現，紙素材，造形ワークショップ

１．はじめに

子どもが創造的に表現するとは，単に作品を完成させることにとどまらず，素材との関わりの中で自由に試行錯誤を重ね，自分らしい方法を見出していく過程にその本質があると考えられる。幼稚園教育要領解説[1)]では，「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにする。」と述べられている。また幼児は，日常生活において出会う様々な事物や事象を友達や教師と共有しながら表現を行い，やがては素材や方法を工夫して活用し，自分にふさわしい表現の方法を見出していくとされている。松岡（2014）[2)]は，子どもの表現活動を通して「自分なり」がどのように現れ，表現にどう作用するかを検証し，その結果をもとに領域「表現」における「自分なり」の意味を整理し，幼児教育における意義を考察した。また吉岡ら[3)]は，子どもの〈造形的行動〉に注目し，「持つ」「触れる」「探す」といった作品化以前の行動を丁寧に読み取ることの重要性を示しており，こうした視点は子どもの表現の芽生えを理解する手がかりとなる。

このように，子どもの創造的表現を捉えるには，その過程における試行錯誤や関わりを丁寧に理解することが重要であると考える。そこで本稿では，筆者により実施された造形ワークショップにおいて，５歳の幼児２人を対象に素材操作や発言，作品の変化を記録した様子を報告する。あわせて，子どもの創造的表現を促す上で重要となる要素を，具体的な事例を通して考察する。

[1]高知学園短期大学　幼児保育学科　*Email: nkawaguchi@kochi-gu.ac.jp

2．造形ワークショップ概要

2－1．造形ワークショップ「くるんとひらくカラフル飾り」

参加者：5歳児 2名

ファシリテーター：筆者

活動時間：約2時間（片付けを含む）

実施日：2025年8月

実施場所：地域の文化施設

素材・用具：帯状の紙（5×30cm）18色，のり，ハサミ，ホッチキス（ステープラー），穴あけパンチ（パンチ），セロハンテープ，メタリック柄の紙帯（3×15cm），マジックペン，毛糸

2－2．方法

ワークショップの主な材料は，5×30cmの細長い帯状の色上質紙である。これらを複数枚重ねて中央をホッチキスで留めた後，各帯を丸める・折る・切るといった操作を行うことで，さまざまな立体的表現へと展開することができる（図1）。この造形活動の特徴は，紙の帯をあらかじめ中央をホッチキスで固定している点にある。そのため，加工を加えると自然に立体的なボリュームが生まれ，偶発的に現れる形態を手がかりに発想を広げることができると考える。

このワークショップのアイデアは，YouTubeチャンネル*Boys & Girls Clubs of the Fox Valley*に公開されている動画*"Paper Symmetry Sculptures"*[5]を参考とした。参照した動画においては紙の帯を「左右対称に加工する」というルールが強調されているのに対し，本ワークショップではその制約を設けず，子どもたちに形の対称性のことは説明していない。この変更により，偶然に生まれる多様な形態や子ども自身の発想の広がりを観察することを目的とした。当日の活動のプロセスやファシリテーターの主な声掛けは（表1）に示す。

2－3．記録方法

本ワークショップの活動記録は，写真撮影およびビデオ撮影を中心に行った。特に，子どもの手の動きや素材との関わり，作品の変化，発言やつぶやきを記録した。撮影位置は，活動全体を見渡せる定点カメラ，重要な場面については手持ちカメラで静止画を補足的に撮影し，後の分析で参照できるよう整理した。環境構成の配置は図2．に示す。

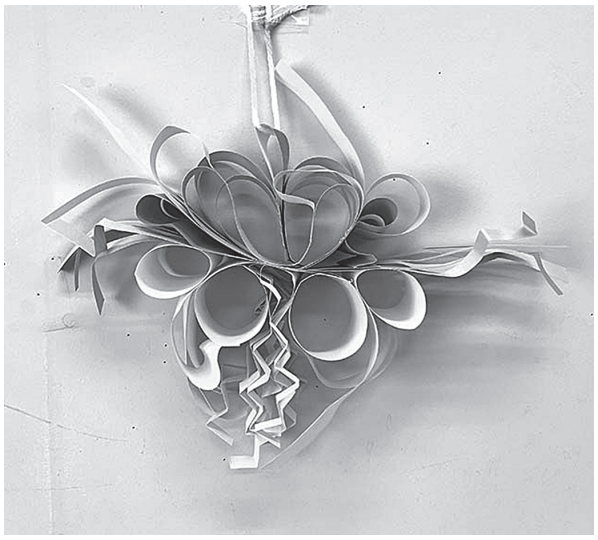


図1．作品見本 筆者制作

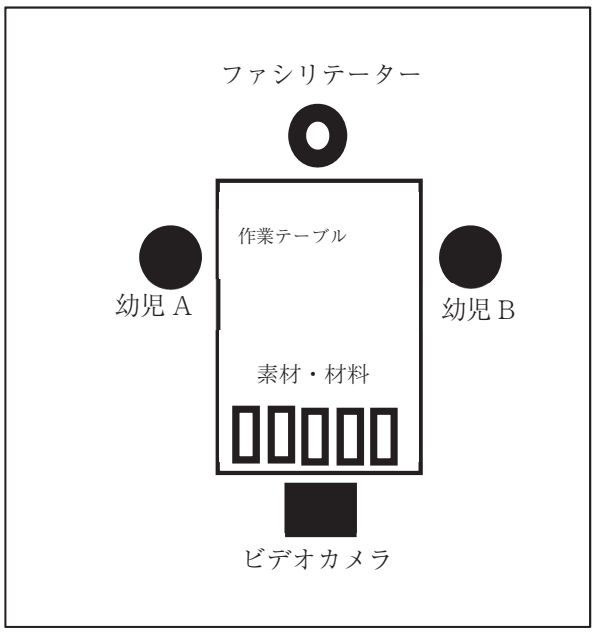


図2．環境構成

表１．活動のプロセス

時間	参加者の活動	指導上の留意点	ファシリテーターの主な声かけ
0:00	①今日の活動内容の説明を聞く。	今日の活動内容を全体に説明し，材料と見本を提示する。細長い帯紙がどのような形になるか，イメージを持てるように促す。	「今日はこんな細長い紙を使います。いろんな色があるよ」「この紙が，こんなふうになるよ」「何に見えるかな？」 「ひらひら，ふわふわだね」 「色々な道具を使うので，まずは道具の使い方を練習してみよう」
0:10	②紙帯を実際に触れ「切る・折る・丸める・ホッチキスで留める，パンチで紙に穴を開ける」などを試す。	細長く切る，蛇腹に折るなどを見本で示しながら一緒に行う。ホッチキスや穴開けパンチなど，普段あまり使わない道具の練習も取り入れる。	「こんなふうに切れるかな？」「まっすぐに切らなくて大丈夫だよ」 「紙を輪にして，ホッチキスでパチンと留められるかな」「こうやって持つよ（使うよ）」 「さっき切った細長い紙を，ホッチキスでくっつけてみよう」「こんな階段みたいな（蛇腹折り）折り方は知っているかな？」「ゆっくりでいいよ」「よく知っているね」
0:25	③３～４枚の紙帯をホッチキスで留めたもので，「切る・丸める・糊つけ」など加工の方法を試す。	３枚の紙帯でどのような形が作れるか，見本を示しながら，一緒に作って見せる。	「次は紙が３枚こんなふうに重なっているよ」 「一番上を輪にしてみよう」 「やってみよう」 「ここに余っている紙も，糊でくっつけたりできるかも」「リボンになるのだね」「どうつけたい？」
0:40	④好きな色の紙帯を７枚選び束にする。自分の選んだ道具を使って自由に制作する。	見本は示さず，子どもたちが自分で手を動かし始めるのを待つ。 ホッチキスを使う時は，保護者やファシリテーターが横につき安全に配慮する。	「７枚くらい、好きな紙を選んでね」 「どうやって作ろうか」 「ここを押さえとくね」 「ここを外すの？」 「こんなふうになるんだね」 「面白い形だね」
1:10	⑤紙をさらに足して，メタリック柄の紙帯も付け足していく。ペンで模様を描く。	セロハンテープ，ペン，メタリック柄の紙帯など，表現を広げるため，新しい素材や道具も用意する。	「こんな色の紙もあるよ」 「もっと紙を使っていいよ」 「新しい形だね」 「やってもいいよ」
1:30	⑥作品に紐をつけて持ってみる。壁に飾ってみて鑑賞する。	毛糸を通して吊るし，作品を展示した上で記念撮影を行う。	「ここの形を足したのね」 「こんなふうにつけられるのね」 「大きくなったね」
1:45	⑦使用した道具を片付け，作品は持ち帰る。	片付けと持ち帰るものについて説明する。	「楽しかったね」

２－４．倫理的配慮

本研究は，研究実施前に保護者に対して研究計画の趣旨や方法，記録内容，成果の公表方法について文書で説明し，同意書を得た上で実施した。

なお，本研究は令和７年度高知学園大学・短期大学研究倫理審査委員会において，研究目的及びインフォームド・コンセントなどに関する審査を受け，その承認を得て実施された。（承認番号第33号）

３．子どもの活動の様子

参加した５歳児２名（以下，Ａ児・Ｂ児とする）の活動を，素材や道具の扱い方や作品の変化に着目し，観察記録の中から特徴的な場面を抽出して示す。なお，帯状の紙は「紙帯」と表記する。

３－１．Ａ児の活動の様子

Ａ児は，18色の紙帯の中から好きな色を選び，ファシリテーターが示した「こんなふうに切れるかな？」という見本を参考に，同じように紙帯を縦に持ち細長く３本に切ることができた。次に，初めて扱うホッチキスを手に取り，ファシリテーターの手本を見ながら紙帯を輪にして留めることができた。

ファシリテーターが蛇腹折りの見本を示すと，過去の自身の造形活動を思い出しながら，自ら蛇腹折りを進めた。

紙帯を３枚に重ね中央をホッチキスで留めた紙帯を渡すと，１枚目を輪にして中央に糊を塗り輪の上部を押さえて出来上がった形を「リボン」と呼んでみせた。 自らの形に意味を与え言葉で表現する姿をみせ，糊で留めた後，その上から再びホッチキスで留めるなど道具へのこだわりもうかがえた。（図３）さらに，次にファシリテーターに促され，８枚の紙帯を選び「お姫様の色」とつぶやき制作を始めた（図４）。１枚目を自ら同様に輪を作って「リボン」にした。糊で接着した後，２枚目以降は，「糊のほうがやりやすい」と発話し，丁寧な手つきで制作を進めた。７枚目だけは紙帯を丸めずにそのまま残し，最後の８枚目を再び「リボン」の形にして留めた。その後，ファシリテーターに促され新しい紙帯を取り，細長く切って丸める，新しい輪を作って重ねるなど，さまざまな方法で形を広げる工夫が見られた。さらに，ファシリテーターが提示した新しい素材であるメタリック柄の細い紙帯やセロハンテープにも関心を示し，制作に取り入れた。セロハンテープで形の方向性を左右や上下だけでなく斜めにも広げていった。仕上げにはペンで模様を描き加えた。最後にファシリテーターが「紐を通すところ」を尋ねると，左右２か所に通したいと答え，作品を縦ではなく横に持って見せた（図５）。完成時には「やったーできた」と声を上げ，達成感を表した。

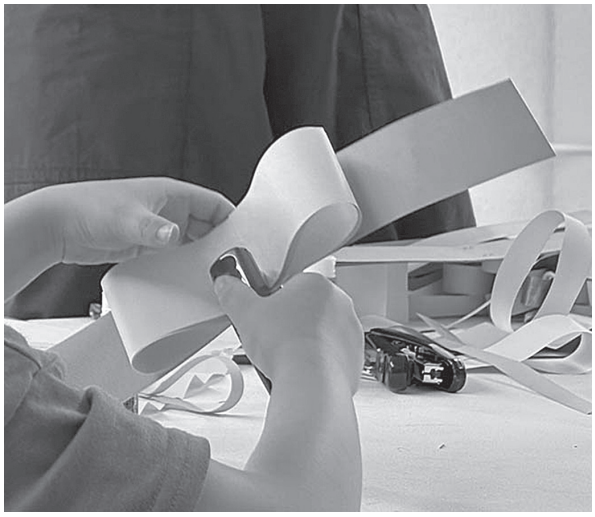


図３．「リボン」の形を制作する

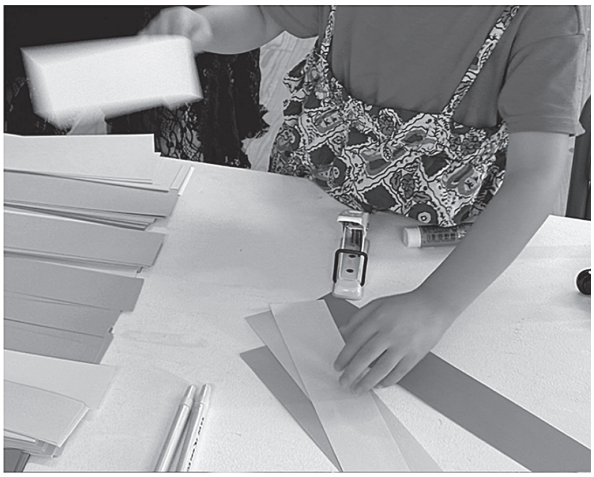


図４．イメージする色を選ぶ



図５．完成作品を見せる

３－２．Ｂ児の活動の様子

Ｂ児は，見本の作品を示されると「え，えー！」と声を上げ，強い関心を示した。ホッチキスの使用を初めて体験し，紙帯を輪にして留めることができた。続いて「穴開ける」と言って穴あけパンチに興味を示し，ファシリテーターの手本を見ながら繰り返し操作した。穴を開ける感触を楽しみながら「まだ穴開ける」と，さらにパンチの構造を観察して内部の紙片を見つけると「穴あけゴミがいっぱいだー」と発話し，道具への興味を示した。次にＡ児の様子を見て「リボンやりたいー」と，４枚重ねの紙帯を受け取った。ファシリテーターの手本に倣い１枚目を輪にして糊で貼り合わせ形を作った。糊の上からさらにホッチキスで留める姿が見られた。途中ファシリテーターが糊を勧めたが，「糊じゃなくてホッチキス」と言いながら，道具へのこだわりを表した。最後の１枚はハサミで切り込みを入れ，紙帯を束ねて輪にしようと試み，援助を受けながらホッチキスで留めた（図６）。できた形を腕に通して遊ぶ姿が見られた。

さらに，７枚重ねの紙帯に取り組み，「次はどうやろう？さっきとおんなじようにやろうかな」と発話した。以降もホッチキスを使用することを楽しみ内部をのぞき込み「パクパクパク」と発話するなど，道具の動きからくるイメージも感じとる様子がうかがえた。

制作過程では，「ここ止めちゃおうかな」と，形が自立できる形を模索していた。また，ファシリテーターに留めたホッチキスを外して欲しいことを頼み，部品の設置位置を変えるなどこだわりがうかがえた。「楽しいよー見て」「こうしよう」と発話しながら工夫し制作を進めていた。先に制作した３枚重ねの形を自ら再び手に取り，縦に重ねてみせた。その後も「もっと大きくしちゃお」と，メタリック柄の新しい紙帯や，新たな紙帯を輪にしてセロハンテープでつなぎ，素材や方法を工夫しながら拡張していった（図７）。輪をつなげながら「わぁおっきい」と呟き，自分のイメージする形を探し，形をセロハンテープで固定し自立させることを試みるなど（図８），最後まで集中して活動を継続する姿が確認された。



図６．４枚の紙帯の造形



図７．形を広げていく



図８．机にセロハンテープを貼り自立させる

4．考　察

本研究で記録したA児，B児の活動を通して，素材，道具，そして工作の造作などにそれぞれのこだわりが垣間見える活動を記録することができた。

素材に関して，この横長の紙帯（５×30cm）の中央をホッチキスで留めるという特徴が顕著に見られた。中央が固定されていることで紙の造作を左右行うことになるが，今回のワークショップでは，左右必ず同じにしなければならないという対称性は指示しなかった。それにもかかわらず，A児，B児ともに自然に左右を同じように操作し，対称性を伴う表現が観察された。A児に関しては「リボン」と発言するなど，形態的な特徴を手がかりにイメージを明確に示していた。

また道具の扱いに注目すると，それぞれの特性に応じて子どもの造形活動の広がりに差異が見出された。ホッチキスや糊を用いた場合，紙帯を用いた造形は主に左右や上下といった方向に向かう展開にとどまる傾向が確認された。これに対して，セロハンテープを導入すると，子どもたちは紙片を斜めに接続したり，異なる位置へ貼り重ねたりするなど，多様で自由度の高い操作を行う姿が確認された。その結果，道具の特性が子どもの表現の展開に影響を及ぼしていることが示唆された。

一方，穴あけパンチについては，提示直後こそB児が繰り返し操作を行なっていたが，以降の制作過程では使用が見られなかった。これは，ホッチキスや糊と異なり，パンチが直接的に形を形成する道具ではなく，造形活動に結びつきにくかったことが要因の一つと考えられる。さらに，穴の特徴を活かせる毛糸などの素材を冒頭から十分に提示しなかったことも影響したと推測される。なお，本研究とは別の同一ワークショップでは，小学生の参加者がパンチで開けた穴に毛糸を通して模様を作る活用例が確認された。このことから，道具の特徴が活かされるか否かは，提示される素材との組み合わせや活動設定に規定されることが示唆される。

本ワークショップでは，子どもたちの造形活動は素材や道具の特性に影響を受けながら展開していたが，その過程を支える要素としてファシリテーター（筆者）の関わりも，活動を支える要因と位置付けられる。（表１）に示したように，指導的な関与は③までであり，その後は活動の進行に伴いファシリテーターの役割は援助や承認が中心となり，制作そのものは子ども自身によって主体的に進められていた。提案的な声掛けを行う場面もあったが，子どもたちはそれを手がかりとしつつも自らの方法で制作を展開する様子が確認された。一方でファシリテーターの役割として，環境調整を意識的に行った。その一例が，道具や材料を提示するタイミングの工夫である。例えば，メタリック柄の紙帯も装飾的な使用に留めたいという意図もあり，制作の終盤に提示した。セロハンテープを最初から使用を控えたのは，自由度の高い接着方法により形が容易に固定され，紙帯の中央を固定するという特徴を活かした造形が活かされにくくなるのではないかと懸念したためである。実際，セロハンテープを導入した後には，造形はより自由な方向へと広がる展開が見られた。このことから，ファシリテーターの環境調整による意図や工夫が，子どもたちが素材と向き合う造形活動に影響を及ぼす要因の一つであることが確認された。

造形的操作に関しては，A児は輪を押さえた形を「リボン」と言葉にし，できあがった形をイメージと結びつけながら制作を進めていた。色を選ぶ場面でも「お姫様の色」と発話し，制作の初期段階から自分なりのイメージを意識していることが確認された。その一方で，セロハンテープを使って形を斜めに設置したり，メタリック柄の紙帯を取り入れたりするなど，新しい素材や道具に柔軟に反応して試みる姿も観察され，当初のイメージに固定されない表現に展開しようとする様子がうかがえた。しかし最終的には紐を左右に取り付け，作品を横に広げて提示する姿があり，結果的には再び「リボン」のイメージに回帰したのではと推察する。制作過程において新たな試みを

取り入れながらも，最終的には最初のイメージへ統合していく子どもの表現のあり方が確認され，注目すべき示唆を含んでいた。

Ｂ児はホッチキスによる連結に強い関心を示し，繰り返しの操作を通して形を作り続けた。道具への関心は操作にとどまらず，内部を開けて観察する姿もあり，道具そのものの構造に興味があることが推察された。制作の過程では，輪をいくつも連結したり，それを立てたり積み重ねたりするなど，構造的な興味に基づく工夫が展開された。こうした活動は，形による具体的なイメージを広げるというよりも，積み重なりからなる形自体の面白さを探求していたことを示している。Ａ児が「リボン」という象徴的イメージをもとに制作を展開していたのに対し，Ｂ児は構造的なつながりを楽しむ傾向を示しており，子どもの思考性を示唆する事例となった。これは，この紙帯による造形活動が，イメージを起点とする表現と，構造探究を起点とする表現とが併存することを示しており，今後の教育実践においても，子どもの志向に応じた環境設定や素材選択の重要性を考える上で手掛かりとなる。

５．まとめ

本報告では，紙帯による子どもの造形活動が同じ環境においても異なる広がりを見せることを確認した。Ａ児はイメージを手がかりに形を展開し，Ｂ児は道具の操作や構造への関心から表現を広げていた。このような違いは，子ども自身の関心や経験に加え，素材や道具の特性，ファシリテーターによる援助や提示の仕方といった環境的要因によって支えられていると言える。もっとも，本研究は限られた少数事例の記録に基づくものであり，素材や道具の提示の違いが造形の展開に与える影響，また他の子どもにおいても同様の傾向が見られるかといった点については十分に明らかにできなかった。これらは今後の研究課題としてさらなる事例の分析と蓄積が必要である。先行研究では佐々木（2017）[5] が幼児期の「左右対称表現」や「くり返し表現」を美術の表現様式との関係から論じており，この知見を踏まえつつ造形的対称性の発達過程を検討していきたい。また，紙帯をホッチキスで固定する位置を中央以外にした場合に生じる変化などについて，新たな研究課題として取り組む予定である。

本研究は少数事例ながら，子どもの造形活動における表現のあり方と，それを支える環境的要因を具体的に示すことができた。教育実践においては，子どもの個々の関心や思考の違いを理解し，それに応じた素材や道具の提示，ファシリテーターの関わり方を工夫することが求められる。今後も研究を継続することで，保育現場における造形活動の展開や教材研究に活かせる基礎的資料として発展させていきたい。

引用文献（References）

１）文部科学省，幼稚園教育要領解説，フレーベル館，2018，233-247.

２）松浦圭子，幼児の造形表現に関する研究―「自分なりに表現する」ことの考察―，*帝京短期大学紀要*，2014，(18)，103-108.

３）吉岡千尋，川口奈々子，隅敦，竹内晋平，自然素材をめぐる子どもの＜造形的行動＞を対象とした質的検討―領域「表現」に関する専門的事項のコード化による子ども理解を意図して―，*基礎造形*，2022，(030)，35-42.

４）Boys & Girls Clubs of the Fox Valley. “Paper Symmetry Sculptures.” YouTube. https://youtu.be/ZWRCyLSkVAA?si=SwZhfQmhvf3m_zNJ,（参照2025-10-01）.

５）佐々木達行，造形，美術教育における幼児・児童の表現様式の意味と美術の表現様式の関係―自己表現として表現様式と表現技術の再考―，*千葉大学教育学部研究紀要*，2017，(65)，137-146.

受付日：令和７年10月16日
受理日：令和７年12月15日

Bulletin of Kochi Gakuen University / Kochi Gakuen College, No. 56（2026） pp. 83-90

Report Paper

The Development of Young Children's Capacity for Artistic Expression in the Medium of Paper: A Practice Report from an Art Workshop

Nanako KAWAGUCHI[1]*

Abstract: This study documents how children express themselves through art activities and examines the involvement of facilitators, clarifying the processes whereby children develop their own forms of artistic expression. In particular, it focuses on how the material qualities of paper, the handling of tools, interactions with facilitators, and their surroundings influence children's artistic expression. The report focuses on the material manipulations, verbal expressions, and artistic evolution. The report's observations suggest that both the use of tools and facilitator assistance expand children's capacity for expression, reflecting their engagement with artistic materials. This report serves as a resource for understanding children's artistic creativity and provides insights to promote a deeper understanding of children and inform future educational practices.

Key Words: young children, children, paper material, art expression, art workshop

[1] Kochi Gakuen College, Department of Childhood Education and Care, *Email: nkawaguchi@kochi-gu.ac.jp